

## 日本海の離島

片野修

### 離島の魅力

離島は魅力にあふれている。新鮮な魚介類を味わえるほか、自然が豊かで独自の動物や植物を観察することができる。とくに春と秋の渡りの季節には、多くの珍しい鳥に出会えることがある。魚釣りのポイントが多く、人が少ないので、ゆったりと楽しむことができるうえに、思わぬ大物に巡り合うことができる。島の人々はやさしく、誰とでも挨拶してくれる。

私は長野県に住んでいるので、とくに日本海の離島を訪れることが多い。昨年(2024年)には4月から10月にかけて、対馬、粟島、飛島、佐渡の4島を楽しんだ。このうち佐渡には二十回以上訪れている。そこで、これらの島々の最新事情について紹介してみたい。

### 粟島

新潟県村上市の粟島は、岩船港からフェリーで約90分(高速船なら60分)の距離にあり、釣り、バードウォッチング、海水浴などの観光で知られている。人口は370人、周囲は22km。フェリーでしか行くことができないので、海が荒れると欠航となる。船の大きさは佐渡のものよりは小さいが、飛島の船よりは大きい。車の運送は島民に限られている。また、フェリーの便数や時刻は季節や曜日によって異なっている。そのために、島に行く場合には、余裕のある日程を組むべきである。村上市には瀬波温泉があるが、混んでいることが多く、そのほかのビジネスホテルや旅館は少ないので、出港を待つ場合には、中条町や新発田市まで探す必要があるかもしれない。島に渡ったのち、予定していた帰りの便が出ないこともある。その場合は、予定を切り上げて帰るか、予定を伸ばすかの選択をする。波浪と風の子報をチェックすることは欠かせない。欠航にともなうキャンセルや延泊について、旅館は柔軟に対応してくれる。

次に重要なのは、宿泊場所の選定である。粟島には民宿も旅館もあり、後者の方がいくらか高いが、それにしても通常1万円かからない。粟島ではどの宿でも食事は充実しているが、廃業する宿も増えているので、あらかじめ電話をかけるか、観光案内所に訊くのがよい。とくに沖磯に渡って釣りをする場合には、船をもっている宿を選ぶべきである。

粟島の宿は、フェリーが発着する内浦地区と対岸の釜谷地区に分けられる。バードウォッチングなら内浦地区、沖磯で釣りを楽しむなら釜谷地区が適している。ただし、堤防や地磯で釣るなら内浦でも十分に楽しめる。内浦の長い堤防のほか、離岸堤に渡れば、クロダイやイシダイ、アオリイカなどが釣れる。内浦の売店では、オキアミなどの釣り餌も売っている。また、どちらの地区にも海水浴場とキャンプ場が整備されている。

バードウォッチングは内浦地区を中心に楽しめる。小学校の周りから奥に広がる畑と、海

沿いに牧場までいく道路沿いが主なポイントだが、八所神社裏の一带も見逃せない。オオルリ、キビタキ、アカハラなどは、内浦の町中でも見ることができる。ヤツガシラは島のいたるところに現れるが、いつでも見られるわけではない。自転車を役場や観光案内所で借りたら、牧平地区まで行くのがよい。途中、急坂を登ることになるが、その右側の海際に大木があり、多くの鳥を見ることができる。粟島では普通の自転車は役場が、電動自転車は観光案内所が管理しており、電動にこだわらなければ不足することはない。

フェリー乗り場には観光案内所があり、島のことをくわしく教えてくれる。その建物には、近頃、ルリビタキとヤツガシラをともなった和服姿の女性の絵（ミューラルアート、壁画）が描かれており、美しい。建物の裏には弁天岩があり、さらにその前のワンドにはクロダイが泳いでいる。このあたりの風景はすばらしい。この近くには公衆温泉もある。

飲食店としては「あわしまや」という食堂が有名で、中華そば、カレー、ワッパ煮のほか、多くの海産物が楽しめる定食がおすすめである。今年、訪れたら、長年店を切り盛りしてきたおばあさんは補佐役になり、若いおかみさんが店を運営していた。このほか、喫茶店があり、ここでも軽食を楽しめるほか、いくつかの食堂があり、時期によってさまざまな料理を味わうことができるだろう。そのほかの楽しみとしては、サイクリングやタコ捕りがある。

粟島の最大の魅力は、島の人の子供から大人まで気持ちよく挨拶してくれることである。この点は、日本一ではないかと思う。小学校や保育所があるので、子供を目にすることが多く、漁港でダンスの練習をしていたり、かけっこをしていたりするのを見るとほほえましい気持ちになる。オオミズナギドリの繁殖地があるために、野良猫の取締りが強化されている。そのせいか、島で猫をほとんど見ない。人口減少と高齢化の波は避けがたく、畑が荒地化しているために野鳥も少なくなっていると言う人もいる。今年の4月23~26日に訪れた際には、全部合わせて5人ほどのバードウォッチャーにしか出会わなかった。のんびり散策できるという点では理想的かもしれない。

## 飛島

飛島は山形県酒田市からフェリーで90分の距離にある。人口は174人、周囲は10kmと粟島のほぼ半分である。フェリーは小さいので、欠航することが多いが、酒田市には多くのホテルがあり、宿を探すのに苦労はない。フェリー乗り場の周辺には人気の海鮮料理店がいくつもある。また、1階の菅原鮮魚の刺身は新鮮でおいしい。

飛島は粟島と同様に、バードウォッチング、釣り、海水浴で知られている。とくにバードウォッチングについては、日本一珍鳥が見られるということで、渡りの時期には多くのバードウォッチャーが訪れる。今年訪れた際には、クロジョウビタキが出たことが話題になっていた。私はマミジロキビタキ、コホオアカ、セイタカシギ、アカエリヒレアシシギの4種を初見することができた。私たちが帰ったのちには、アカマシコ、ヤイロチョウ、シマアカモズ、キバラムシクイなどが現れたらしい。この島のバードウォッチャーはレベルが高いので、



多くの珍鳥を見ることができる飛島学校裏

わからない鳥がいたら初心者は気軽に聞いてみたらよい。また、ベテランでもわからない鳥については、日本野鳥の会、山形支部の築川堅治さんが滞在していれば、教えてもらえるだろう。あらかじめガイドを頼むこともできるかもしれない。

島には、舗装された縦断道路の周りに探鳥のための遊歩道が整備されており、いたるところに珍鳥を見るポイントがある。縦断道路の周りの畑、休校中の学校裏の草地、ヘリポートがよく知られているが、どこで珍鳥が出るかは予測しにくい。一方で、粟島にも言えることだが、毎日鳥は入れ替わるので、古い情報は役に立たない。くわしくはホームページ「定期船とびしま」の野鳥情報を参考にされたい。

珍鳥に目が行きがちであるが、本土でよく見られる鳥について、離島での生態や社会を調査することも重要であると思う。セキレイ類、カラス、スズメ、キジバト、トビなどは、離島でもよく見かける。徒歩で島を一周することもできるが、自転車を借りることもできる。ただし、近年、自転車の台数は少なく、争奪戦になっている。

飛島ではラーメンが名物になっていたが、今年の5月に訪れた際には2店とも営業していなかった。島でランチを食べられるのは、フェリー乗り場の二階にある「しまかへ」とい飲食店だけであった。ここの海鮮丼や漬け丼はおいしかった。カレーのごはんは島の形になっていた。ただし、宿泊施設によっては、予約をすれば、お弁当をつくってくれたり、ランチを提供してくれたりする。

釣りをするなら、沖磯に渡してもらるか、船をチャーターする方法もあるが、宿の近くの堤防でアジなどを釣ることもできる。ただし、釣り餌は限られたものしか売っていないので、酒田で買って持っていく方が無難である。私は秋に行った際に、釣ったアジを生き餌にして、

大きなアオリイカを釣ったことがある。秋には、堤防の際で大きなタコも釣れた。

飛島には現在子供はおらず、そのために小中学校は休校となっている。子供が移住するか生まれれば、学校は再開すると思われる。営業を止めた民宿も目立ち、高齢化が進んでいると実感した。一方で、若者がきびきびと働いているのが目についた。私たちはネット予約ができ Wifi もあるので沢口旅館に泊まったのだが、おかみも従業員もみな若かった。あとでわかったことだが、沢口旅館と「しまかへ」は島の活性化を目的とした合同会社「とびしま」が営業しており、若い社員を募っているらしい。冬の閑散期に有給休暇を3か月与える点が魅力になっている。5月連休後の平日でも、沢口旅館には20名ほどのバードウォッチャーが宿泊しており、この島には宿泊客を呼び込む大きな魅力があると実感した。

ほかに6月にはトビシマカンゾウの花を楽しむことができる。平安時代の人骨が見つかったり、平家の武者が落ちのびてきた跡をたどったり、賽の河原と言われている不思議なスポットがあったり、釣りや鳥以外の楽しみもある。ウミネコの繁殖地は、人家の近くにあり、その個体数は減っているらしいが、なお壮観である。渡り鳥や海水浴の季節をはずして、ゆったりした時間を楽しむのもよいのではないかと思う。

最近、長野で鳥が少なくなっているのを実感している。5月のベストシーズンに、塩嶺小島の森や戸隠森林公園など、バードウォッチングの名所で見ることのできる鳥が少なくなっている。昨年、北海道の網走を訪れた際にも、やはり鳥が少ないと聞いた。飛島に10年ほど前に訪れた際には、5月の連休直前だったが、ルリビタキが300羽、オオルリ、キビタキ、アカハラがそれぞれ100羽ほど観察できた。今回は5月の連休後であったが、キビタキが20羽、オオルリが1羽観察できただけであり、アカハラは見なかった。しかし、私の見聞した観察は限られているので、実際には鳥は減っておらず、逆に増えているかもしれない。

鳥が減少しているとすれば、鳥インフルエンザの影響が考えられ、越冬地、経由地、繁殖地における環境の悪化も疑われる。その点で、信頼できる調査が必要である。環境省等による鳥類の全国繁殖分布調査は約20年おきに行われており、前回は2016~2021年の結果が公表されている。全国の2000地点以上でしらべているので信頼性は高いと思われるが、調査間隔が長いので、ごく最近の傾向はわからない。渡り鳥の飛来調査は毎年行われているが、冬鳥とくにカモ類とハクチョウ等に限られる。夏鳥も含めて調査地点をしばっても、毎年の調査が必要であり、減少種については対策を考えるべきではないだろうか。また、今年の能登地震では、渡り鳥にとって重要な舩倉島が大規模な被害を受けた。日本海の離島に対して、その振興と鳥の保全のための施策が必要である。・・・この原稿を書き終えたのち、2024年の10月に環境省と日本自然保護協会の調査により、里山の鳥類と蝶類が急速に減少していることが公表された。

## 佐渡島

佐渡島の面積は東京 23 区の合計よりも広く、海岸線は 280km もある。その人口は 47,000 人であるが、近年、急速に減少しており、閉店した飲食店が目につくようになっている。私は釣りをするために佐渡に通うようになったが、その後、国内移入種のカワムツが生息していることがわかり、その調査を目的に訪島したこともある。近頃は鳥にも気をつけている。しかし、佐渡は広く、北東の端に位置する弾崎が鳥見の場所として知られているが、私はあまり珍鳥を見ていない。移入されたトキは増えており、国仲平野の水田ならば、どこでも見ることができるようになった。

佐渡の長所は、フェリーのほか飛行場もあり、交通の便がよいことである。フェリーは大型で車も運送してくれる。とくに両津―新潟経路は波高 5m でも欠航することはなく、安心して島に滞在することができる。直江津―小木経路は一時閉鎖されていたが、現在では再び利用できるようになった。旅館やホテルも充実している。かつては修学旅行生などの団体客をターゲットとしたサービスの悪い大旅館があったが、その多くは結局つぶれて、質の高い旅館だけが残っている。その食事のおいしさ、とくに海鮮料理の質の高さは傑出しており、宿泊料金も 8 千円ほどから 5 万円ほどまでさまざまあるが、リーズナブルである。私は新しくできた「たびのホテル」をよく利用するようになった。このホテルは最新設備、温泉、レストラン、Wifi が備わっており、プランによっては部屋で調理をすることもできる。

佐渡には回転寿司店が 2 か所あり、コスパの点で高いレベルにある。島中に漁港があり、そこで新鮮な魚が水揚げされるのであるから、魚がおいしいのは当然かもしれない。一方で、旅館でふんだんに魚料理が出されるので、2、3 日もすると魚に飽きてくる。この場合には、おいしいラーメン、中華料理、洋食を楽しめる店がある。

佐渡ではかつては溪流釣りやアユ釣りを楽しんだことがある。3 月に海から遡上してきたアメマスが入れ食いになったこともある。私は釣ったことがないが、サクラマスも釣れるらしい。アユは 9 月に成長し、20cm を超える良型が 20 尾以上釣れたことがある。しかし、近年は漁業協同組合が羽茂川だけになったことや河川の水量が乏しいこともあって、よい釣果をえられにくくなっている。小さな川ではアユの成長は悪く、9 月になっても 10cm にもなっていないアユがうようよいる。このアユが秋になって産卵後に海に流れると、それをめがけて魚食魚が河口に集まってくる。

海では沖磯に渡してもらい釣りと堤防や地磯での釣りが楽しめる。メインターゲットはクロダイとマダイだが、ヒラメやマゴチもよく釣れる。イシダイを専門に狙う人もいる。地元の人には食べるためにアジを狙っている。このほか、秋になると、アオリイカを求めて、多くの若者が佐渡にやってくる。釣り具店は各地にあり、釣り餌の購入に困ることはない。その中で、佐和田地区の山田屋の釣果情報は魅力的だったが、近年は更新されなくなった。

春の乗っ込みのシーズンにはどこでもクロダイが釣れるが、かつてに比べて乗っ込みの時期が早まっており、その見極めがむずかしい。外洋に面した磯では、フグなどのエサ取りが多いので、その場合には底が砂地の内湾の方がよい。クロダイを狙っていても、体長が 70cm を超えるマダイやブリがかかることがあり、私も何度かハリスを切られたことがある。

そのために、私は佐渡で釣る場合にはハリスをフロロの3号にしている。

両津地区に加茂湖があり、クロダイが湧いていると言われたこともあったが、現在撒き餌が禁止になっている。また海側の町中では釣りができる場所が乏しく、全体として魅力がなくなっている。一方、海の防波堤もほとんどが立ち入り禁止になり、侵入できないバリケードが設置されている。このために、釣り場所としての佐渡の魅力は年々乏しくなっている。

なぜ立ち入り禁止になったかといえば、堤防などで事故死した釣り人の遺族が、県や国の管理責任のせいだと訴訟をおこすからである。この問題についてはあらためて論じたいが、このままでは佐渡を訪れる釣り人は減る一方であろう。

佐渡の観光としては、釣りのほかに、金山などの遺構、トキ関連の施設、島に流された文化人や天皇にゆかりのある寺社、海水浴場などがある。世界文化遺産に登録されたことによって、今後観光客は増えるであろう。私は小木の近くの宿根木の町並みとその裏側にあって、かつての地震によって隆起した地磯が好きである。宿根木の近くの小木博物館は民俗学者宮本常一の提唱によってつくられたもので、廃校を利用しているが、佐渡の民俗俱が集められており充実している。真野にある佐渡歴史伝説館では、島に流された順徳天皇、日蓮聖人、世阿弥のからくり人形によって、その歴史を学ぶことができる。このほか、佐渡には句碑や歌碑が多く、それを訪ねる楽しみもある。

佐渡では、近年はアウトドアについての企画や環境に配慮した事業も増えている。海に囲まれているだけでなく1000m級の山もあり、歴史遺産が多いことをアピールすることによって、一層の活性化をはかってほしい。

## そのほかの離島

日本海に浮かぶそのほかの離島としては、舩倉島、隠岐、対馬、壱岐に行ったことがあるが、いずれも1回訪れただけなので、ここではくわしく紹介しない。ただ対馬については、韓国からの旅行客が多くなって活気が感じられた。名物のアナゴ料理をはじめとする海鮮ものや対馬そばを味わえる。クロダイの釣り場がよく知られているが、大型のキスがよく釣れることも魅力的である。舩倉島は釣りやバードウォッチングの名所であり、一刻も早く復旧してほしい。

2024年から各地でクマによる人身被害がおきている。山間地での人口減少と高齢化によるものだが、ハンターの減少と高齢化もあって、しばらく続くのではないかと思う。その結果、住民の安全が脅かされるのはもちろんだが、観光地としての魅力も失われることになるだろう。とくに登山、ハイキング、溪流釣り、バードウォッチングなどは命がけになる。その点で、クマが生息しない日本海の離島は魅力的である。魅力的ではあるが、人口減少の波は離島にも押し寄せるので、フェリーや宿泊場所、飲食店がこれからも維持されるかどうかはわからない。多くの人が訪れて楽しむことによって離島がさらに活性化し、その魅力が存続することを望みたい。